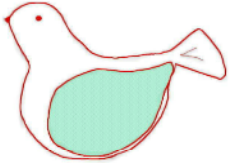
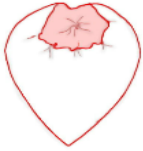
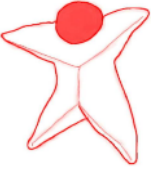













つるし飾りは子供の健やかな成長を「願うもの」です。それを「誰にお願いするのか」を考えれば、^{おの}自ずとそれが神仏に
対するものだということが分かりますが、最近のつるし飾りには願意の曖昧なものが多くなっていますので、少し詳しくに
記してみました。

<p>さんばそう たいこ 三番叟 太鼓</p> <p>祝い事につきもののおめでたい演目。</p> 	<p>発祥の地、稲取のつるし飾りの特徴は稲取八幡神社に奉納する芸能の^{こどもさんばそう}子供三番叟が飾られていることです。</p> <p>^{いなとりはちまんじんじゃ}稲取八幡神社は稲取の^{そうちんじゅしゃ}総鎮守社。源^{みなもとのよりとも}頼朝とのゆかりを伝える古社で、頼朝が寄進したと伝えられる^{まもりほんぞん}守本尊（伝^{じかくだいし}慈覚大師作の薬師像）がまつられていて、境内には頼朝が源氏再興を祈願して水垢離を行ったと伝えられる^{きがん みずごり}井戸があります。毎年七月十四日、十五日の^{れいたいさい}例大祭には「^{こどもさんばそう}子供三番叟」が奉納され、境内が賑わいます。つるし飾りの三番叟はこの子供三番叟をモデルにしています。^{たいこ}太鼓も三番叟に使います。</p>
<p>^{はと}鳩</p> <p>神の使い。鳩はむせないともいわれ、お乳を飲む赤ちゃんがむせないように。</p>   <p>八幡宮額面 鎌倉のお土産品「鳩サブレ」は八幡様の鳩に由来しています。</p>	<p>鳩は八幡神社の^{つかいめ}御神使で、由緒ある八幡宮の^{ゆいしょ}鳥居額面は八幡の「八」を向かい合った鳩で書いてあります。</p> <p>現代では、鳩は平和のシンボルとされていますが、それはユダヤ教の旧約聖書の「ノアの^{はこぶね}方舟」に由来します。</p> <p>「ノアは方舟を完成させると、家族とその妻子、すべての動物のつがいを方舟に乗せた。豪雨は四十日四十夜続き、地上に生きていたものを滅ぼしつくし、水は百五十日の間、地上で勢いを失わなかった。四十日のあと、ノアは^{からす}鴉を放ったが、とまるところがなく帰ってきた。七日後、もう一度鳩を放すと、鳩はオリーブの葉をくわえて船に戻ってきた。」これは洪水が治まって地上に緑がす平安が戻ったことを示します。</p> <p>現代の鳩は、安^な穏^{あん}で平和な暮らしの在^あ処^んを教えてくれる平和の象徴ですが、キツネ＝お稲荷さまのように、古来の鳩は人の世の様子を八幡神に伝えるための御神使です。</p> <p>八幡神社の本来の呼称は「ヤハタ神」といいます。従来の日本の神々は「^{やおよろず}八百万の神」というように氏族ごとの^{うじがみ}氏神や^{ばんぶつ}万物個別の神でしたが、八幡神社は全ての神に^{ちようえつ}超越する最強の神であるという^{きようぎ}教義です。ユダヤ教の唯一神ヤハウェの教義や呼称に似ていることからこれを取り入れたものという説もあり、八幡神の使徒が鳩であることもこの説を^{ほそく}補足するものになっていますが、源氏は他の神を信じる敵よりも優位であるとして、八幡神を深く^{やはたがみ}崇^し敬^としています。</p> <p>つるし飾りの鳩は、^{すこ}健やかな子供の成長を願う親の思いを神に届けてもらう大事な役目ですから、最も上部に飾るのが通例です。</p>
<p>^{もも}桃</p> <p>女性の象徴。邪気悪霊を退治し、延命長寿を意味します。早く花が咲き、実が多いので多産を象徴します。</p> 	<p>^{こじき}古事記では、^{よみ}黄泉の国の^{あくりょう}悪霊に追われた^{いざなぎのみこと}伊弉諾尊が桃の木から桃の実を三つとり、悪霊に投げつけると悪霊たちはことごとく退散しました。</p> <p>三国時代の魏で信仰された道教では、長寿や邪気払いの^{せんか}仙果として尊ばれてきました。同時代に建設されて^{ひみこ}牟弥呼の墓ではないかと話題になった^{はしか}箸墓古墳からも供物の桃の種が大量に出土していますから、日本でも古くから邪気払いの果物とされていました。現在のおしりの丸い桃は明治になって入った外来品種で、昔の桃は桃太郎の桃のようにおしりがとがった桃でした。桃の節句でもあることから、稲取のつるし飾りでは桃、猿、三角が基本になっています。</p>
<p>^{ざる}猿</p> <p>厄が去る。難が去る。</p> 	<p>ざる、ざるばともいいます。災難が「ざる」願いからこの名をいいますが、本来は人間に災難が及ばないよう身代わりの^{かたしろ}形代です。作り方が容易なため、全国で社寺飾りに使われています。</p>

<p>くくり猿</p> 	<p>猿は「災難が去る」にかけていますが、くくり猿は手足をくくって「幸せが逃げない」様に願っています。</p> <p>「客足を止める」「恋人の気持ちを留める」から、商売繁盛や恋愛のお守りにしている神社もあります。</p>
<p>さんかく 三角</p> <p>香袋、薬袋 貴重なお香は気を静める薬代わりでもありました。</p> 	<p>三角は香^{こう}袋^{ぶくろ}、薬^{くすり}袋^{ぶくろ}を意味します。つるし飾りのほか、社寺奉納にこの三角が多く使われるのは薬^{かたしる}の形^{かたしる}代^{かたしる}を奉納して家族の病気を防いでもらうためです。</p> <p>三角は別名「ひうち」ともいいます。ひうちは建物の角の変形を防ぐ筋^{すじ}交^{かい}のことで、これのできる形は三角形ですからこの名があります。火打ち石を使った切り火^{しやき}も邪気を払うためですから、三角形の形に正常^{おか}を犯す邪気払いの意味を持たせているのでしょう。稲取八幡神社の守本尊は病治癒の薬師如来ですから、この三角はつるし飾りの基本モチーフです。</p>
<p>ほおずき</p> <p>女性のお守りとされている。婦人病の薬効。疳の虫封じ。</p> 	<p>ほおずきは平安時代から、鎮^{ちん}静^{せい}、咳^{たん}、痰^げ、解^{ねつ}熱^つ、冷え性などに効果がある薬として利用されてきました。根茎には流産の危険性がある物質が含まれていますが、一般的には「女性の薬」と思われていて、女の子たちは種を取りだした実を鳴らして遊びました。</p> <p>仏教習俗ではガクに包まれた果実を枝付きで梵^{ぼん}欄^だに飾り、先祖の霊を導く提^{ちよう}灯^{ちん}に見立てます。つるし飾りに用いられるほおずきも、子供のしあわせをご先祖様も見守って欲しいという願意からでしょう。</p>
<p>うさぎ 宝袋^{たからぶくろ}</p> <p>赤い目のうさぎは神様のお使いで、呪力がある。</p>  <p>中国由来の神仙思想において、月^には西王母^{しおうは}という仙女が治める世界であり、そこでは枯決して枯れない木(月桂樹)のもとで不老不死の薬をウサギが作っているとされている。</p>	<p>白うさぎも大^{おお}国^{こく}主^{しゅ}命^{めい}(大黒様)の神話に由来します。大国主命とその兄弟達(八十神)は因幡^{いなば}のヤガミヒメを妻にしようと旅に出ますが、八十神達は嫁迎いの宝物を入れた大きな袋を大国主命に持たせて先に行ってしまうと、皮をむかれた上に肉が赤くひび割れたうさぎが泣いていました。これが因幡の白うさぎと大国主命の出会いですが、大国主命はうさぎに、傷を治すため蒲^{がま}の穂^ほで体をくるむことを教えます。</p> <p>ここまでは多くの人が知っている話ですが、古事記ではこの後の話に続きます。</p> <p>因幡の白うさぎは鰐^{わに}鮫^{ざめ}をだまして皮をむかれますが、先に行った八十神達はうさぎに傷を海水で洗って風の吹く丘の上で乾かせば直るとだましていたのです。白うさぎは助けてもらった大国主命にいいます。「先の意地悪な人達ではなく、ヤガミヒメは心優しいあなたのお嫁様になるでしょう」大国主命が大きな宝袋^{たからぶくろ}を背負っているのはこの故事からですが、大国主命の結婚が白うさぎの予言どおりになったことから、因幡の白兔神社は特定の人(恋人)との縁結びの神になっています。女子のしあわせを願うつるし飾りにはぜひとも取り入れたいモチーフです。</p>
<p>ももうさぎ (真向きうさぎ)^{まむき}</p>  	<p>吉兆^{きつちよう}(おめでたいきざし)のうさぎが正面を向いているので、幸運がもたらされるとされているうさぎ。江戸時代に流行して、家紋や大名の用度品、名家の釘隠^{くぎかくし}などに多く使われた縁起のよいモチーフ。</p>
<p>たい 鯛^{きんめだい} 金目鯛</p> <p>赤い色は魔除けの色。おめでたには欠かせない</p> <p>稲取名産の縁起物。</p> 	<p>金目鯛^{きんめだい}は稲取特産。本来は豊漁^{えびす}をもたらす「恵比須様」の真鯛^{まだい}であったと思われますが、稲取では真鯛よりも金目鯛の方が大切な魚なので入れ替わっています。</p> <p>最近^{きんめだい}はかわいい赤い魚で、金魚をモチーフにしたところが多く見受けられますが、本来の豊饒^{ほうじよう}を願う意味が失われています。</p>

<p>たわら 俵ねずみ</p> <p>ねずみは大黒様のお使い。金運や五穀豊穰を意味する。</p> 	<p>海の豊饒の神、恵比須に対して大黒様は田畑の豊饒の神で、ねずみはその神使であるとされています。</p> <p>古事記には大國主命（大黒様）が火攻めにあったとき、ねずみに地下のほこらを教えられて助かっていますが、仏教の大黒天は北方の神で、十二支では北は子の方向であるので、このことも大黒様とねずみを結びつけています。大黒様の祭りは旧暦十一月の子の日を祭日にして黒豆や二股大根などを飾りますが、つるし飾りの場合、ねずみは単独ではなく俵ねずみとして飾ります。</p>
<p>にわとり 鶏</p> <p>朝早くから元気で働くように。</p> 	<p>神社の鳥居は鳥の止まり木をシンボル化したものであるように、日本の神話には多くの鳥の話が出てきます。神武東征の金色の鶏、八咫鳥、日本武尊の白鳥などがありますが、天照大神が天の岩戸にかくれたとき、ときを上げて朝を告げた鶏はその縁で太陽の神である天照大神を祀る伊勢神宮の神使となっており、境内にはたくさんの鶏がいます。</p> <p>鶏は一日の始まりを告げる大事な日の神のお使いです。</p>
<p>は 這い子・這う子</p> <p>這えば立て、立てば歩めの親心。</p>	 <p>早く元気に這い回る子供になるように願って布で作った人形です。</p>
<p>すずめ 雀 ふくろう</p> <p>雀は五穀豊穰。 ふくろうは不苦労に通じる。</p>	<p>豊作のときは雀が増える。雀が太ることは豊作の証拠でめでたい象徴です。</p> <p>ふくろうは福郎、不苦労に通じ、子供に福が来るよう、苦労をしないようにという願い。</p>
<p>ぼうず かたしろ てるてる坊主（形代）</p> <p>てるてる坊主。人型の原点。</p> 	<p>一般的にいう、てるてる坊主の形は自分の身代わりの形代です。晴天を願うてるてる坊主も、自分が窓の外で願う代わりに吊り下げるもので、つるし飾りのてるてる坊主も、娘がしあわせになるようお願いしていますという自分の身代わりですから、上部のわかりやすい位置に飾ります。</p>
<p>とうがらし 唐辛子</p> <p>悪い虫がつかない。</p> 	<p>南米原産の唐辛子は室町末期に南蛮船で日本に伝えられたものです。料理にも使用されましたが、強烈な刺激から虫除けにも使われました。病原菌の知識がなかった時代には、「病気は邪気や悪い虫が起こすもの」でしたから、「悪い虫がつかない」は「悪い男が近づかない」というより「病気避け」のおまじないです。地域によっては「疱瘡避け」のまじないにもなっています。</p>
<p>はまぐり 蛤</p> <p>ていせつ 貞節の象徴。</p>	<p>蛤は蝶番部分の形が個体ごとに異なるため、他の貝と組み合わせることができません。この性質を利用したのが、貝の内側に絵を描いて組み合わせる「貝合わせ」です。このことから他と交わらない貞節の象徴になっています。</p>
<p>おかたごろ、おかたさま</p> <p>おかたとは高貴な女性の呼称。</p> 	<p>語源はお方頃。おかたぐるともいいます。伊豆では花嫁のことも「おかたさま」と呼びました。女の子の手持ち人形です。</p>
<p>ちょう 蝶</p> <p>蝶は夫婦仲のよい結婚の象徴です。</p>	<p>昔の結婚式（祝言）では男女の子供が三三九度の盃にお酒を注ぐ酌人をしました。この子供のことを雄蝶雌蝶といいます。現代の神前式では代理で巫女が酌人をつとめますが、結納には布で作った男蝶女蝶を添えることもあります。蝶は夫婦仲のよい結婚の象徴です。</p>

<p>しっぽうまり てまり 七宝鞠 手鞠</p> <p>丸く幸せになるよう</p> 	<p>いくつもの輪をつなげた模様のうち、輪の四分の一ずつをずらし繋げた模様を四方つなぎ といいましたが、四方を七宝に言い換え、このつなぎ形を立体化して作った鞠を仏教の七宝 に(金、銀、瑠璃、玻璃、シャコ、珊瑚、瑪瑙)に見立てた七宝鞠といえます。</p> <p>蹴鞠は貴族男子の遊びでしたが、手鞠は女の子の遊び道具で、雛祭りの飾りにも使います。 「柳川さげもん」では手鞠を飾りの芯にしている、一般的には七宝鞠よりも豪華に見えます。 秋田の「ごてんまり」は手まりに房をつけてつるし飾りにしています。</p>
<p>かく みの 隠れ蓑</p> <p>雨風にぬれないように、病よ</p> <p>けの宝物。</p> 	<p>彦一とんち話にある天狗の隠れ蓑は、これで覆うと姿を消すことができる魔法の蓑です。 流行り病などが広がっても、疫病神から身を隠す事ができるようにという親心からつるし 飾りに取り入れられています。</p> <p>隠れ蓑の形を蟬としているかざりもあります。蟬は地中に七年もいることから、「辛抱強い 子になるように」とか、「なく子は育つ」とされていますが、樹上の蟬は薄命の象徴であるこ とや、蟬の寿命七年説は1950年代に初めて表されていますので、この説明付けは無理が あるように思います。同様、昔は使われなかったモチーフに椿があります。椿は首が落ちる として縁起物のつるしには使わなかったものでしたが、最近は普通に見かけるようになりました。</p>
<p>花</p> <p>花のように</p>  <p>愛らしく。</p>	<p>京都御所の左近の桜も初期は梅の花だったといいますが、平安以後は「花」といえば 桜を指します。最近のつるし飾りモチーフで6弁の花を見か けることが多いですが、梅も桜も桃も橘も、一重花はすべて5弁ですから、ひな飾りの花 はやはり 5弁でありたいですね。</p>
<p>なんてん 南天</p> <p>難を転ずる。</p> 	<p>つるし飾りの解説書に「かわいいさくらんぼ」と あってびっくりしましたが、本当は南天の実です。難 を転ずる、として家の鬼門にも植えますが、語呂合 わせだけでなく南天は解熱、咳止めに効果がありま す。葉は有毒ですが、微量であるため防腐剤を兼ね た彩りとして、赤飯や羊羹などに乗せてあります。</p>
<p>まくら ざぶとん 枕 座布団</p> <p>よだれかけ・腹巻き</p> <p>かき にんじん 柿・人参</p> <p>つる かめ 鶴・亀</p> <p>え び 海老</p>	<p>枕、布団、座布団などはお嫁入り支度の象徴です。寝る子は育つの言い伝え。早くお座 りができるように。</p> <p>赤いよだれかけは厄除けでお地蔵様などにも掛けます。</p> <p>現代では、冬の果物の代表は温州ミカンですが、古くは柿が栄養価のある果実の代表 でした。江戸期から栽培が始まった人参とともに病除けの食物です。</p> <p>鶴は千年、亀は万年。鶴亀は定番の長寿の象徴です。</p> <p>夫婦が共に老い、同じ墓に葬られる仲睦まじい結婚生活を意味する「偕老同穴 の契り」(偕は穴は墓の意味)から「偕老」と同音の「海老(えび)」も長寿を象徴す る縁起物です。</p>

